

古館 紘（長崎闘争団）さん 2009年6月9日ご逝去



追悼文

古館さん！本当に残念です。2年前に体調を崩されながらも、私達と共に活動することを熱望し、苦しい闘病生活に耐えられていたのに、こんなに早く、66歳の若さで永遠の眠りにつかれるとは思いませんでした。

貴方は、1966年（昭和37年）4月に長崎客貨車区の整備掛として国鉄に入社され、その後、車両検査係として客貨車、電車の検査・修繕を担当されてきました。その知識、技能は優れ、効率的で無駄がなく、ひとことで言えば「仕事ができる人」として、組合員は勿論、管理者からも高く評価されていました。また、分会の執行委員としての役職を担って頂きました。

私が、1968年（昭和43年）に長崎客貨車区に就職した時には、検査・修繕の技術を丁寧に指導され、また、国鉄の宿舎も近くだったこともあり、2人の子供も大変可愛がっていただきました。

当時の長崎客貨車区にはソフトボール部があり、チームの遊撃手として活躍され、長崎市民早朝ソフトボール大会で優勝した時の立役者でもありました。飛んできたボールを驚づかみにして投げる華麗な守備が今でも目に浮かびます。

貴方は、酒が強く、どんなに飲んでも崩れることもなく、いつも平静な態度を保たれていました。口数は余り多くありませんでしたが、その考え方、行動には少しのぶれもなく、「信念の人」「侍・古館」と呼ぶのがぴったりだと私は常々から思っていました。

その中で一番の思い出が、1970年（昭和45年）9月、生産性向上運動（70生運動）反対闘争の最中に、分会がスト突入の指令を受け、当局の攻撃で組織が分裂した時に、烈火の如く怒った貴方の行動が印象的でした。そのことは、今でも仲間内の話題にのぼるほどです。

また、私達との会話の中では、時に人の心をついた「楽しい皮肉」を聞かせてもらうのが楽しみであり、それは仲間「襟を正して頑張ろう」と自覚させる意味があったと思

います。

しかし、仕事も人一倍熱心であり、国労組合員として活動してきた貴方も、長崎機関区人材活用センターに配属され、1987年2月16日にJR九州の不採用通告を受けました。

そのことについて、私の脳裏から離れないことがあります。それは、その翌日に当局から、不採用の通告をされた貴方に対して、JR九州に採用された動労組合員のために、「電車検修の見習いを指導せよ」との業務命令を出した事です。時分はJRの仕事が出来ないにもかかわらず、そのJRの仕事を教えなければならなかった貴方の胸中を察すると余り有るものがあります。

貴方は、闘争団員になっても国労組合員としての誇りを持ち、長崎市の清掃・駐車場、ケーキ屋等、いくつもの仕事に就かれ、仕事、人間関係の困難さをのりこえ、愚痴ひとつこぼさず闘争団を支えていただきました。また、仕事以外の時には、国労の闘いへ積極的に参加され、その言動は闘争団員の心の中にいつまでも生き続けるものと思います。

奥さんから聞きました。貴方は、2週間前に「JR不採用事件が解決したとの夢」を見られたそうですね。苦しい病床の中で何を願っていたのか、その思いを聞いたときには言葉もありませんでした。

今日、所属組合の差別による長年の闘いは、幾多の苦難をのりこえ、情勢は解決の方向に一歩々前進しているものと確信しています。その日が一日も早く来ること。貴方が切望していた「解決」。このことに応えるのが私達の使命であり、解決を実現させて必ず墓前に報告させていただきます。

古館さん。本当に長い間、ご苦労様でした。安らかにお休みください。

2009年6月11日

国労長崎地区闘争団 団長 榎本英俊

全国の国労の各級機関、闘争団、連帯する会等から多くのご香料、弔電をいただき厚くお礼を申し上げます。